

2013年1月20日 発行

市史だより

F u k u o k a

16

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Autumn/Winter 2012

TAKE FREE

特集

七隈

土ものがたり

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」 ● 連載コラム「福岡市史への歩み」
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）



樋井川の支流である七隈川の西側には、なかなか地形「台地」が北へと伸びています。この比較的細長い台地は、二万五〇〇〇年前（後期旧石器時代）から現代に至るまで、ある時は生活の場として、またある時は墓域として、活用されてきました。弥生時代後期には拠点となる集落（飯倉D遺跡）が営まれ、その後弥生時代終末から古墳時代に差し掛かる頃（二八〇〇年前）には台地全体を集落が覆います。以降、台地は常に生活の場となり、現在ある住宅街へとつながるのです。

さてこの台地の基盤は、一億年前に形成された花崗岩です。花崗岩は比較的風化しやすく、今ある地表付近では、岩石の名残をとどめながらも土と化しています。この風化した花崗岩層には、部分的に橙色や白色、褐色の粘土が層状に見られます（写真■）。今回は、この粘土をめぐる七隈の歴史を紹介します。

● 粘土質の土地

粘土は、昔から土器作りなどに使われてきました。古墳時代に生産された須恵器などは、窯で焼成されるので、高温に耐えるようキメの細かさや不純物の少なさといった、原料と

なる粘土の「質」が重要になります。良い粘土がなければ、窯焼きに適した粘土になるよう手を加える必要がありましたが、七隈の粘土は質が良いので、須恵器の原料としては十分喜ばれたことでしょう。

この一帯は、古くからおおむね農村地帯であったと考えられます（近世期には藩士が居住していた記録もあります）。畑作を中心とした農家が多かったようですが、やがて粘土を「素材」として供給する人も出てきました。七隈は近くに高取焼の窯場（現・早良区）があり、また、陶器製造を行っていた西新町へ行くにも便利な場所に位置していたので、その需要は途切れることはなかったでしょう。

● 粘土から煉瓦を作る

近代の日本は殖産興業政策を展開して、産業技術の向上を図ります。なかでも鉄は産業の基幹をなすものとして重要視され、国産鉄鋼の安定供給のため、さまざまな努力がなされました。

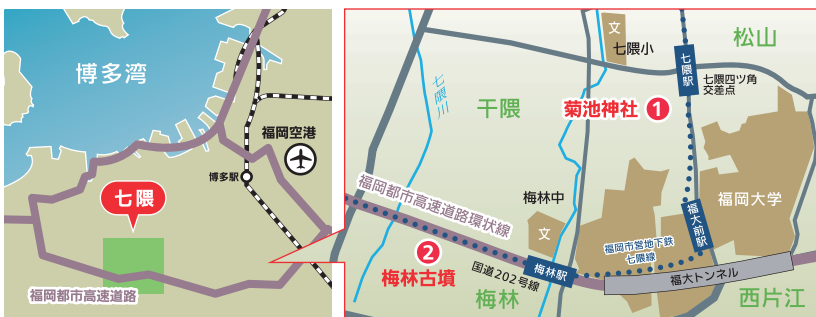
このとき鉄の生産において、鉄自体の開発もさることながら、原料が融けても融けない炉の壁、つまり鉄が融ける温度よりも高温に耐える素材の開発が急務となりました。幕末から耐

火素材の研究は進められていましたが、溶鉱炉のような大規模な設備に用いられる耐火煉瓦の開発は、いまだ研究段階だったのです。官民それぞれで研究開発が重ねられ、明治二十年代までに東京をはじめ各地で興った耐火煉瓦メーカーが、博覧会や共進会でその耐火度を競い合っていたといえます。

そういった時勢のなか七隈では、採取した粘土から耐火煉瓦を生産するため、明治二十四（一八九二）年に九州耐火煉瓦株式会社が創業しました。『日本近世窯業史』（大日本窯業協会、一九三〇）によると、当時の作業は粘土採取から焼成まで、すべてを手作業で行っていたようです。九州耐火煉瓦株式会社は九州で創られた耐火煉瓦工場のはしりでしたが、二〜三年ほどでいったん解散することになります。

● 官営製鉄所と耐火煉瓦工場

第一次松方内閣（一八九一〜九二）が官営製鉄所の建設計画を立案すると、それまで輸用品に頼っていた耐火物の国内製造がますます重要な課題となりました。製鉄所の計画自体は議会の反対もあり、なかなか本格始動とは



アクセス

- 1 菊池神社
【市営地下鉄】七隈線「七隈駅」下車、徒歩5分
- 2 梅林古墳
【市営地下鉄】七隈線「梅林駅」下車、徒歩10分



2



3



5



▲タカパン塚

▲飯塚F遺跡

4



粘土

風化した花崗岩

粘土



1

- 1 風化した（真砂になった）花崗岩の下に黄褐色粘土層が見える。ここからさらに深く掘り下げて良質の白色粘土を採取する
 2 昭和10年代の七隈。中央の建物は福岡高等商業学校（現・福岡大学） 3 梅林古墳全景と出土した装飾器台（共に高さ33cm程）
 4 焼きの良い須恵器（左）に比べ、右は焼きが不十分（灰白色で脆く崩れやすい）。焼きが悪い須恵器は遠くに運ばれないので、近くに窯があったのかもしれない（共に胸部幅9cm程）
 5 飯倉D遺跡出土のビーズ玉と鋳型。鋳型には鏡を作る際に青銅を流し込むための注ぎ口が見える

いきませんでした。その間も耐火物に関する調査は進められました。高品質な耐火物製造は難しく、当時製鉄所の計画に携わっていた金子堅太郎は、明治二十七年の衆議院で「国内の粘土を調査して、耐火煉瓦を製作し試験してみたが、熱に耐えかねて割れてしまう。外国製と比べれば不完全であり、さらなる試験を必要とする」と語っています。

明治二十九年、ついに「製鐵所官制」が發布され、翌年、官営製鐵所を八幡（現・北九州市）に建設することが告示されると、製鐵所への耐火煉瓦の供給を目的としてか、明治三十三年に七隈の耐火煉瓦工場が再開しました。

しかし、明治三十五年頃国が実施した耐火素材の調査では、七隈の粘土について「耐火度の良い粘土層もあるがどれも薄く、平均すると耐火度は製鉄用には不十分」と評価されています（『日本近世窯業史』）。七隈の粘土は層状に産出するため、良質の粘土のみを簡単に、かつ大量に採ることが難しく、当時、国が求める質と量には及ばなかったのです。結局この調査結果を受けて、七隈の粘土が直接的に国家プロジェクトの一端を担うことはなくなりました。

再開した七隈の煉瓦工場は筑前耐火物煉瓦製造所と改称し、日露戦争（一九〇四〜〇五）後の工業勃興を機に、別府（現・城南区）に

七隈 — 土ものがたり —

特集

分工場を設け操業を続けました。七隈をはじめ地元で採れた粘土から耐火煉瓦や建築用煉瓦を製造し、時には必要に応じて官営製鉄所へも納品していたのです（『日本近世窯業史』）。

●博多人形をつくる「土」

七隈で採れる粘土の中には、鉄分が少ない（白い）という特徴を持ったものもあります。粘土にとって不純物である鉄分は粘土の色の決め手となります（橙色の粘土は、鉄さびが粘土の粒に付いているイメージしてください）。熱を加えると鉄はいっそう濃く発色するので、白く鉄分が少ない粘土は、加熱後の色も淡いということになります。陶器を淡い色調に仕上げる場合や、焼成後に彩色を施す人形製作などでは、この地色の淡さが重要なポイントとなるのです。

福岡の伝統工芸品として広く知られる博多人形も、この七隈の粘土を用いて製作されています。博多人形の原料は、古くは博多南部の麦野むぎの付近の粘土が主に用いられていました。しかし、麦野の粘土はやや地色が青・黄など色味を帯びているという欠点があり

ました。また、かつての博多人形は六〇七〇度の低温で焼かれており、そのため大変割れやすかったとされます。

しかし、明治の終わりから大正にかけて博多人形の需要が高まると、遠路の運搬や海外輸出にも耐えうる強度が求められるようになりました。試行錯誤の結果、人形の原料としては油山あぶらやま付近の粘土がふさわしいとされ、大正・昭和にかけて博多人形用の粘土採取場は麦野から田島・七隈へと移っていきます。原料の質や製作技術の向上などもあって、昭和前期には焼成温度が九〇〇度まで上がり、以前より割れにくい人形製作が可能になりました。また、七隈の粘土は、色が白く粒子が細かいという特徴から、博多人形の原料として主流になっていきました。

●宅地化と産業の変化

戦後になると七隈を取り巻く環境も変わっていきます。昭和十二（一九三五年）には近隣に福岡高等商業学校（現・福岡大学）が開校していましたが、戦後はそれに加え西南学院大学神学部校舎および学生寮が完成しまし

ひとくちコラム

祀られた武将・菊池武時



▲菊池寂阿（武時）の墓碑

七隈には明治2（1869）年に創建された「菊池神社」があります。祭神は楠木正成に「忠功第一」の人物と賞賛された鎌倉時代の武将・菊池武時です。

武時は、元弘3（1333）年に博多で挙兵し鎮西探題を攻めますが、討死してしまいます。伝承では馬上にいた武時の首は六本松で落ち、胴体は七隈で落ちたと伝えられています。

いつから武時の墓が七隈にあると認識されていたのかは判然としませんが、『筑前国統風土記拾遺』には七隈村の椎木に塚があり、その塚は菊池寂阿（武時）の体を埋葬した墓であると記されていますので、少なくとも近世後期にはそういった話があったのかもしれませんが。

天保期には福岡藩士で菊池家の遠い子孫という城武貞が、藩の許可を得て有志と共に自費で塚の周辺を整備し、「菊池寂阿公之墓」と刻んだ碑を建て、天保3（1832）年、没後五百年祭を挙行了しました。

武貞は武時の墓の特定にずいぶんと腐心しています。武貞は幕末には勤王家として活動した人物で、平野国臣や藤四郎とも親交があったようです。同じ家とはいえ、直接の先祖ではない武時の墓を特定・整備し、石碑を建て、五百年祭を挙行了したのは、単に先祖だからというだけではない、勤王家としての思いがあったのではないのでしょうか。



6 昭和42年の福岡大学前バス停の様子（現・片江5丁目付近）。まだ道路は舗装されておらず、雨上がりなのか足元が泥状になっているのが分かる



7 昭和59年の金山団地前。現在では道幅が拡張され片側2車線の4車線道路となり、「城南学園通り」となった。地下には市営地下鉄七隈線が並走している

た。それでも昭和三十年代まではまだまだ農地や雑木林の多い土地でしたが、昭和四十年代も後半になると団地の建設などもあり、一気に宅地化の波が押し寄せます。それまで農業のかたわら粘土を採取していた家々の多くは、その土地を住宅用に供給するようになり、粘土の供給は減少していききました。

また一方では、新産業の台頭によって、それまで陶器だった日用品はプラスチック製に、陶製の土管はコンクリートや塩化ビニル製に、そして関東大震災で被害を受けた煉瓦建築は鉄筋コンクリートへと転換を遂げ、工業用としての粘土の需要もまた大幅に減少していききました。

しかし、量が少なくなっただけとはいえ、やはりその質の良さから七隈の粘土の需要は根強く、今でも博多人形や高取焼など伝統工芸品の原料、また学校用教材としても使われており、現在「七隈粘土製作所」が七隈で唯一の粘土製作所として、その供給を一手に引き受けています。

今では七隈は学生街や静かな住宅地として知られています。しかし、かつては煉瓦などの資材を生産する工場があり、七隈で採れる粘土が今日まで受け継がれた伝統工芸を「地」で支えてきたという一面もまた、七隈の街が持つ歴史の一頁なのです。

森鷗外と福岡

平成二十四年は文豪森鷗外（一八六二〜一九二二）が誕生して一五〇周年になる。石見国津和野藩（現・島根県津和野町）の御典医の家に生まれた鷗外（本名・林太郎）は、十九歳で東京帝国大学医学部を卒業して軍医となり、明治三十二（一八九九）年二月には軍医監（少将相当）に昇任、そして六月十九日に第十二師団軍医部長として小倉に赴任して来た。着任早々、福岡・佐賀等の管下部隊の衛生状態や兵士の健康状態などの巡視を行い、七月六日には第二十四聯隊福岡衛戍病院を訪れている。そこで『福岡日日新聞』の記者の質問に対し、近頃は文学とは疎遠になっているが、九州は史蹟が多いところなので、勉強して文学の材料を見つけることを楽しみにしていると答えている。鷗外は軍医として軍事糧餉（軍隊の食糧）に大きな関心を持ち、執筆はもちろんで、翌年の九月二十日に福岡の社交団体である博渉会が主催した福岡市内での公開演説会でも、軍事糧餉について語っている。三十四年五月十七日に徴兵検査視察で来福、さらに九月十九



▲福岡衛戍病院があった福岡城本丸跡

日の聯隊検閲の際は、再び博渉会の主催で東公園の一方亭において講演を行っている。また、鷗外は『福岡日日新聞』に数回寄稿しており、珍しいものでは三十五年元旦の、黄檗宗の高僧であり小倉福聚寺開山の即非（二六一六〜七二）に関する年譜がある。鷗外は同寺の僧侶と親交があり、また幼少の時に藩校養老館で学んだ漢学の素養もあって「即非年譜」が執筆されたと思われる。ところがこの年三月に東京の第一師団軍医部長への異動が発令され、福岡第二十四聯隊長も出席しての小倉偕行社での送別会ののち、三月二十六日に鷗外夫妻は小倉を離れた。なお、鷗外と親交があった後任の武谷水城（一八五二〜一九三九、御笠郡出身）もまた、筑紫史談会を主宰するなど、鷗外同様に歴史や文化財に造詣が深い軍医部長であった。

歴・史・万・華・鏡

テキスト・田鍋隆男

『新修 福岡市史 資料編 近現代1 維新見聞記』刊行記念シンポジウム

● 「福岡発・明治維新へのまなざし～『維新雑誌』とその時代～」を開催しました

9月1日(土)に福岡市博物館講座室1においてシンポジウムを開催しました。このシンポジウムは『資料編 近現代1』の刊行によって判明した新事実と資料編の意義について、市民の皆様へ報告する機会となりました。当日は定員の150名を超える多数のご来場をいただき、大変ご好評をいただきました。また、多くの方に『資料編 近現代1』を手にとっていただけたことと思います。

まず基調報告「『維新雑誌』と福岡の明治維新」、関連報告「著者・加瀬元将の肖像「幕末の戦争と風聞～『維新雑誌』の情報史的的位置」において、今回収録された『維新雑誌』の内容について説明を行いました。続いて大阪大学の飯塚一幸先生による記念講演「『維新雑誌』の可能性」により、『維新雑誌』によって福岡の明治維新について新たに考えるべき点について指摘がなされました。その後、講演者、報告者に有馬学福岡市史編集委員長(福岡市博物館長)を交えて討論を行い、資料編の刊行意義について確認しました。

なお、この記念講演は概要を『市史研究ふくおか』第8号(市内各図書館などで閲覧可能)に掲載予定です。



飯塚 一幸 先生
大阪大学大学院教授

お知らせ

● 第8回福岡市史講演会「15・16世紀の博多と東アジア」を開催しました

10月6日(土)に福岡市立中央市民センターホールで、第8回福岡市史講演会を開催しました。当日は310名もの来場者があり、あらためて博多の歴史への高い関心と、市史に対する期待を感じる講演会となりました。当日ご参加いただいた皆様には、心よりお礼を申し上げます。今回は「15・16世紀の博多と東アジア」と題し、対外関係史で多くの成果をおさめられている伊藤幸司先生・中野等先生にお話しいただきました。

伊藤幸司先生には「大内氏と博多」と題し、15世紀の博多についてお話しいただきました。山口を本拠地とする大内氏が、「九州大名」とよばれるくらい博多と深い関係にあったことについて、博多の名刹・聖福寺・承天寺などの禅寺との関わりから紐解いていただきました。この時代は、大内氏が唐物によって一方的に利益を得るだけでなく、博多にとってもその貿易によって、たびたびみまわれた火災から復興を遂げるなど、安定した時代であったというお話からは、大内氏の博多に対する支配という言葉だけでは片づけられない、両者の関係を知ることができました。



伊藤 幸司 先生
山口県立大学准教授/
福岡市史編集委員会中世専門部会副部長



中野 等 先生

九州大学大学院教授/
福岡市史編集委員会近世専門部会副部長

「豊臣秀吉と博多」と題して中野等先生にお話しいただいた16世紀の博多は、先の伊藤先生がお話しされた“博多の輝かしい時代”に比べれば、これまで注目される機会が少なかった時代かもしれません。しかし中野先生には、博多が文禄・慶長の役のなかで物資供給の役割を担っていたこと、終戦に際しては引き揚げの場所となり、講和が成立するまでは石田三成を中心としながら前線基地として緊張した時間を過ごしたことなど、いぜんとして歴史のなかで重要な役割を演じていたことを、断片的な史料からあざやかに読み解いていただきました。秀吉による“博多城”の築城計画があったことや、関ヶ原の戦後に博多の役割が低下する一因には、秀吉の博多に対する直接支配の反動があるという見解は、今後の研究の指針となるものではないかと感じます。

今回の講演会は、博多の歴史を時の権力者との関わりをなかで考えるものでした。それによって、博多の役割が15世紀の大内氏の時代から16世紀の秀吉の時代にかけて、大きく変質していくこと、しかしそのなかにあっても、博多はいぜんとして対外関係において重要な役割を果たし、大内氏が形づくった外交の担い手たちも活躍を続けていたことが、より鮮明に浮かび上がってきました。いずれの講演も、史料をたねんに読み込むなかで生まれた堅実な研究成果で、福岡の歴史研究にあらたな展開をもたらすものであったと思います。このような市史の成果を、今後もさまざまな形でお届けしていきたいと考えています。

考 古

平成十七（二〇〇五）年三月二十日、玄界島げんかいじまの西方沖を震源として大きな地震が起こりました。当時報道された玄界島や埋め立て地を中心とした被害状況は、防災意識をいっそう高めるきっかけとなりました。地震のみならず、近年の集中豪雨による河川氾濫はんらんは都心部浸水の強烈な映像とともに記憶に新しいところです。

平成二十五年刊行の『特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』では、防災活動の一助となるべく、過去に起こった大きな災害について、行われた多様な分析を、研究者の視点から分かりやすくお伝えします。

古 代

墨書土器（文字を記した土器）の集成作業に本格的に取りかかりました。市内出土のものはおおむね把握していましたが、さらに筑前・筑後の範囲で広く集めることにしています。これによって、市域で出土したものの特徴も、よりはっきり見えてくると思います。今回の作業では、ほかの自治体の文化財担当の方々にも協力を仰ぎました。報告書をめぐりなおしてもらい、遺物のデータはもちろんのこと、実測図や写真も揃えてもらっています。よく知られた遺物であっても、その地域で豊かな経験を積まれた方々の目で見直してもらうことによって、新たな成果が期待できます。これらは『資料編 古代2』（平成三十二年刊行予定）に収録する予定です。

中 世

既刊の『資料編 中世1』は福岡市内所在史料を集めたものですが、紙幅の都合上、収録を見送らざるを得なかった資料もありました。現在編集中の『資料編 中世2』には、福岡市外に所在する史料を中心に収録することになっていますが、一部『中世1』に収録できなかった市内所在史料も収録する予定です。『中世1』の発刊後に市内で発見された史料もあり、それらも『中世2』に収録したいと考えています。まだまだすぐ近くに史料が眠っているのではないかと感じていますので、もし皆さんのご自宅やご近所で古文書のようなものが見つかりましたら、ぜひとも市史編さん室まで一報ください。

近 世

平成二十五年刊行の『特別編 福岡城―築城から現代まで―』の編集に追われる毎日です。江戸時代の福岡城については、これまでいろいろな書籍が刊行されているので、わかっていることも多いですが、まだまだわかっていないことがたくさんあります。特に近代以降は終戦までのほとんどの年月を軍隊が駐留していたこともあり、お城があった地域で一体何が行われていたのかあまり明らかにされていませんでした。戦後についてもさまざまな施設が入ってきたり、出て行ったり、意外と知られていない歴史がそこにはあります。今回の『福岡城』は近世から現代までのお城があった地域および大濠やお城周りの堀までを含んだ地域の歴史をぎゅっと詰め込んだ一冊となります。

近 現 代

『資料編 近現代2』に収録する予定の史料を入力する作業を始めています。そのなかで興味深い記述があるので紹介しましょう。それは、那珂なかと・御笠みかさ・蓆田むしろた郡の郡役所が作成した事務書類で、明治二十二年の市制施行によってあらたに発足する市を「博多市」と仮に呼んでいることです。周辺の町村からは新市名として「博多」が有力であると思われていたことがわかります。結局、市名は「福岡市」派と「博多市」派に分かれて争われ、僅差で「福岡市」に決定されました。しかし、「福岡市」に決定した後も市名の変更を希望する声が多く、「福岡」派と「博多」派の意見がたびたび新聞紙面を賑わせています。

民 俗

平成二十七年刊行の『民俗編 二ひとと人々』に向けて、各自調査に奔走、成果を会議で報告し検討するという作業が続いています。この巻では、市内に暮らす個人の生きてきた足跡や、地域・地域ごとの活動などをとりあげる予定です。もちろんすべてを描くことはできませんが、全体を通読すると、そこに描かれた人々の暮らしが私たちひとりひとりの暮らしともどこかで関わるようなもの、市民の方が「自分の街について書かれた本だ」という実感を持てるものを目指しています。自治体史の民俗編としては風変わり、それだけに悩むことも多いのですが、民俗専門部会の総力を挙げてこの難題に取り組んでいます。

今回は旧「福岡市史」の第1巻の発行に関して特徴的な点を取り上げました。1,600頁余に及ぶ大部の出来を第1点とし、第2点は明治期全体を対象として内容は行政全般にわたっていること、第3点は編さん作業時間がわずか3年間という短期間であったことを報告しました。今回はその続きです。

第4点には編さん体制の問題があります。編さん委員に任じられたのは行政の管理職、それも助役以下局長、次長といった幹部職員であり、多忙な彼らが実際に資料集めや執筆などの業務にあたったとは考えられません。ゴーサインが出たからといって特に増員された様子はなく、業務日誌などからみると、当時の編さん室は小野主任以外に事務員1名、臨時的任用職員3名という体制だったようです。ただし、発行の年、第1稿の校正には大学生が10名程度動員されているという資料が残っていますから、臨時的に採用された人はいたかもしれませんが、体系的な資料が出てこない限り、現時点では原稿執筆はほとんど小野一人だったと考えるほうが正確かもしれません。

最後に資料についてです。「福岡市史」が明治以降を対象とすることになった大きな理由は、古くから計画されている割には資(史)料が残っていないか、または集められていないからだといわれてきました。特に大戦の空襲被害はよく強調されてきました。しかし明治編と一言にいても45年間ありますし、部分的には江戸時代のことも記されています。そして

その資料が行政側で揃えられないとしたら、新聞記事に頼らなければならないのは必然のことでしょう。ある新聞社には資料収集や写真の転載に及ぶ形で協力依頼の公文書が出されている様子です。

この明治期の新聞を1枚1枚めぐり市政の記事を探したのは誰なのでしょう。古い新聞をめくり記事を探すという経験がある人は多いでしょう。かく申す私もその一人です。そして目的以外の記事に目を奪われ、時間をロスした思い出もあるのではないのでしょうか。短期間で大量の新聞に目を通すことは一人ではあまりにも非効率と考えるのは現代人だけでしょうか。目当ての記事を見つけても、今日のように簡便に使える複写機があるわけではないのです。すべて手書きによる複写だったはず。新聞からの資料収集の方策があったとしても、それは大変な労力だったと考える以外ありません。しかしながら収集対象や資料収集システムといった実務に関することをうかがい知れる資料はまだ見つかりません。「福岡市史」の内容の如何を問う前にこの事実に対してだけで驚きの連続です。

ともあれ『福岡市史 第一巻 明治編』は発行されるのですが、巻末には昭和34年3月31日付の奥付があります。以上述べてきた驚異的な状況の中で、この編さん事業は一つの成果を生み出したのですが、続いて2年後の36年3月30日には明治編資料集を発行しています。ただ脱帽するのみです。

参考文献

- 梅林新市「郷土玩具研究シリーズ別冊第二巻 稿本 古博多人形史」(郷土玩具研究会、1966年)
- 杉田清「鉄鋼業における耐火物技術の歴史的概観」(『新日鐵技術』第388号、2008年)
- 大日本帝国議会誌刊行会編「大日本帝国議会誌 第三巻」(大日本帝国議会誌刊行会、1927年)
- 大日本窯業協会「第二編 耐火煉瓦」(『日本近世窯業史』1914年、『日本窯業史総説』第1巻、柏書房、1991年復刻)
- 竹内清和「耐火煉瓦の歴史—セラミック史の一断面—」(内田老鶴園、1990年)
- 日本科学史学会「日本科学技術史大系 第2巻・通史(2)」(第一法規出版、1967年)
- 日本鉄鋼協会監修、杉田清「叢書 鉄鋼技術の流れ 第1シリーズ第3巻 製鉄・製鋼用耐火物—高温への挑戦の記録—」(培風館、1995年)
- 博多人形沿革史編纂委員会「博多人形沿革史」(博多人形工業協同組合、2001年)
- 百武秀「福岡地方の古い赤れんがの化学成分 第2報」(『福岡大学工学集報』第77号、福岡大学、2006年)
- 平柳敬資「鉄鋼用を中心とした耐火物技術の系統化調査」(国立科学博物館産業技術史料情報センター編「技術の系統化調査報告 共同研究編第3集」、国立科学博物館九州産業技術保存継承センター、2009年)

資料所載

- 福岡大学大学史料室【P3:写真②/P5:写真⑥、⑦】
- 福岡市埋蔵文化財センター【P3:写真③(遺物)、④、⑤】

写真提供

- 市史編さん室
【表紙/P3:写真①/P5:歴史万華鏡(福岡城本丸跡)/表紙の写真】
- 福岡市埋蔵文化財センター【P3:写真③、④、⑤】
- 福岡大学大学史料室【P3:写真②/P5:写真⑥、⑦】
- 七隈公民館【P4:ひとくちコラム(基礎)】

(敬称略)

●お詫び● 「市史だより Fukuoka 15」に掲載の「特集 那珂」の記事に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。 P2【誤】「駅馬」▶【正】「駅馬」

表紙の写真：七隈の粘土採取場



一見すると「ここはどこ？」という、不思議な風景です。これは、特集で登場した七隈粘土製作所さんが所有する、粘土採取場の様子です。住宅街に突然現れる土の壁は大迫力で、見る者を圧倒します。粘土層は地表部分にもはっきり現れていましたが、土地を削り、さらに4mほど深く掘り下げた地点にある、良質な粘土を採取するのだそうです。今回の特集にあたり、七隈粘土製作所の大原さんにいろいろと取材させていただきました。お忙しい中、基本的な質問にも丁寧に応じていただき、とても勉強になりました。また、毎号の事ながら取材の際には地域の方々のご協力をいただき、特に七隈公民館と七隈郷土史研究会の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて、皆様に厚くお礼申し上げます。